

VII

都市デザインと市民参加 平成23年6月15日



講師
網河功



講師
賀谷まゆみ

鈴木：今日は「都市デザインと市民参加」というテーマで、お二人をお招きしております。現在、環境創造局の網河功さんと現在、市民局の賀谷まゆみさんです。

平成4年(1992)に都市デザイン室の中に、市民まちづくりの担当が設置されて、それからさまざまな試みが行われていくのですが、網河さんはその担当として、賀谷さんは企画調査課で、それと連動するような形で活動されていました。横浜で市民参加のまちづくりが始まっていく草創期に、かなり「どっぷり」とやられていた、という形かと思います。

網河さん、賀谷さんの順にお話しただいて、その後、皆さんと意見の交換、という形で進めたいと思います。それでは早速、網河さん、よろしく願います。

網河：皆さん、今晚は、網河です。現在は環境創造局の公園事務所に勤めています。私は平成4年(1992)から6年間、都市デザイン室の担当を務め、その後、平成14年(2002)から21年(2009)まで、都市デザイン室の担当係長として在籍して、都合14年やっております。

今回お話す「都市デザインと市民参加」は、最初に私が都市デザイン室に来た頃の平成4年(1992)当時と、その前後の頃の話になります。ちょうど、平成元年(1989)が市制100周年で横浜博覧会が開かれて、高秀市政が始まった頃ですね。平成3年(1991)には第1回目の都市デザインフォーラムが開催されました。

都心部以外の再生へ

都市デザイン室では「都心部の再生」というところで活動を始めましたけれども、その頃から都心部以外のところにも少しずつ、活動範囲を広げてきておりました。横浜の景観ビジョンを作るためにスタディーした時の、横浜の景観区分図を見ると、中心部があつて、その周りの大体、環状2号線の内側を都心周辺区、その外側を郊外区という分け方をしています。都心周辺区についてもだんだん、まちづくり、地域ごとのまちの個性をつくっていく、ということで活動を始めております。

大体、昭和50年(1975)代の中盤から後半ぐらいに

かけて、今まで都心部でやってきた歩行者空間づくりとかを郊外に展開する、ということで、郊外部の歩行者空間整備調査、それに続いて区の魅力づくり、あとは魅力ある道路づくり事業などが行われます。

当時、都市デザイン室の活動の目的は「魅力ある空間づくり」でした。具体的には、こういうところにプロムナードを造ろう、とか、この地域にはこんな資源があるので、こういうものを生かしていこう、とか。そういう具体的なことを、この地域の個性をつくることとしてやったらいいのでは、という提案をしながらやってきています。

ですから、この中では、直接、市民参加には特に触れていないのです。実際やる時には、住民がたくさんいますので、そういうところの関わりは出てくるのですけれども、特段、市民参加という視点があつてやっているわけではないですね。実際にやったものの一つが「神奈川の歴史の道」【図1】や「磯子アベニュー」【図2】。かなり実験的というかチャレンジングな事業でした。

郊外部に出ると、水、緑といった環境が豊かになりますので、そういうものを活かして、その場所らしさをつくっていく、ということで、河川改修で残った旧河道を活かして、親水緑道を造ったりしました【図3】。川は、都市化によってコンクリートで固められてなかなか近づけない空間だったものを、もう一度、親水広場のようなものを整備して、市民が身近に自然に触れられる場所を計画しました。三ツ沢せせらぎ緑道【図4】もその一つです。

大体、みんな昭和50年(1975)代後半頃に実施されました。郊外部でも、都心部で展開してきたような、いろいろな公共事業などをお互いつないでいって、その地域全体でまちづくりを広げていこう、という動きもありました。例えば、金沢区庁舎のところ、その中庭と一体となっている泥亀(でいき)公園を整備して、その周辺には金沢歴史の道や走川プロムナードを整備する。時代はそれぞれ違うのですけれども、関連させて取り組みを広げていく、という事例があります。ここに至っても、あまり市民参加という話にはなっていない。



図1:左上 = 神奈川歴史の道
図2:左下 = 磯子アベニュー
図3:右上 = 和泉川親水緑道
図4:右下 = ミツ沢せせらぎ緑道
資料提供 = 横浜市

土井一成
小沢朗

今井信二
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

図5：郊外のまちづくりの流れ
資料提供＝網河功

昭和53年	郊外部歩行者空間整備調査		
昭和54年			
昭和55年	区の魅力づくり調査 南、磯子、鶴見、		都市デザイン基本問題調査
昭和56年	神奈川、保土ケ谷、港南		21世紀プラン
昭和57年		道路の 魅力づくり 調査	郊外地域総合整備調査 緑、港北、旭、瀬谷、 金沢、戸塚
昭和58年			都市デザイン白書
昭和59年			
昭和60年			
昭和61年	水と緑のまちづくり基本構想・		
昭和62年	各水系基本計画		
昭和63年			
平成元年			都市デザイン白書
平成2年	地域まちづくりシステム 検討調査1・2		南太田 WS
平成3年	都市デザインフォーラム・地域展開型事業		身近な環境整備における 市民参加方式検討調査
平成4年	地域まちづくり推進事業		
平成5年		市民まちづくりフォーラム	ゆめはま 2010

VII

都市デザインと市民参加

南太田地区のワークショップ

市民参加という形では、いろいろ実験的にワークショップと言えるようなものを実施しています。特に公園づくりなどは市民参加がしやすい、ということがあります。昭和50年(1975)代から、市民参加の形でワークショップがやられるようになってきます。

平成3年(1991)に都市デザインフォーラムが開かれる前段階として、南太田地区のワークショップがあります。南区の大岡川のところから、Y校のグラウンドやその周辺をずっと上って行って、清水ヶ丘公園に至るまでの道があります。その付近の南太田2丁目フレンド公園づくり、ブロムナードづくり、それからY校のポート乗り場、南太田小学校の校庭と連続する公園づくり、こういうものを住民参加でプランを作って、まちづくりをしていこうじゃないか、ということで、実験的に取り組まれたものです。

それ以前は単体で、市民参加のワークショップをいくつかの公園でやったりしていましたが、この

南太田のまちづくりワークショップの時に初めて、徹底的に面的に広げていこう、ということをやりました。

その後、「地域集積型事業の施策化に向けた提案」をやります。南太田のまちづくりワークショップを終えて、その後、次の展開を考えようという時に計画をしたものです。都市デザイン室で当時、その次の地域まちづくりを打ち出すために、平成4年(1992)に「身近な環境整備における市民参加方式の検討調査」を行い、それをもとに「地域集積型事業」というものを提案しました。これは、南太田でやったように、面的にいろいろと市民参加でまちづくりを進めていこう、というもので、いろんな局に事業がまたがるのですけれども、それぞれ事業化して、一つの地域に集中投下して、地域まちづくりを進めていく、ということを計画していました。

これが、都市デザイン室に、都市デザインフォーラムの後に市民まちづくり推進担当というのができて、進んでいく時の、一つの視点になったのです。次に展開していくための布石を、この調査の時に打っていたわけですね。

図6：水と緑のまちづくり（子どもたちのワークショップ）
資料提供＝横浜市



第1回都市デザインフォーラム

話をちよつと戻しまして、南太田のワークショップをしている時に、そういった都市デザイン室としての地域展開戦略を考えていく一方で、ちょうど、この時代になってくると、市民の側の動きもかなり活発になってきて、市民の自主的なまちづくり活動が、各地でいろいろ見られるようになってきました。ただ、その辺から具体的なまちづくり、目に見えるハードのまちづくりに結実していくものは非常にまれでした。非常に盛んになっているので、こういうものをもう少し、まちづくりでうまく一緒にやっていくことはできないだろうか、と考えていきました。

そういうふうには時代も変わってきている、ということで、行政が用意したステージでワークショップをやる、という形だけではなくて、市民が自主的に活動しているものを、逆にまちづくりに取り込んでいくことが必要になってくるだろう、という考えがありました。そういう中で平成3年(1991)度に都市デザインフォーラムが行われました。

都市デザインフォーラムは、全体的にはどちらかと言うと、がっちりとした学術的な国際会議をメインとした取り組みです。その中で、「地域展開型事業」ということで、横浜の各地域で活動する市民団体などにスポットを当てて、そういうものも市民会議などの形で発表の場を設けています。

同じく、そのフォーラムの発表の日に至るまでに、実験的に、市民活動に資金的な支援などもしています。それまでも一緒に活動するとかはあったので

すが、正式に行政から、任意の(まちづくり分野の)市民活動に補助金を出して活動を支援していく、というようなものは多分、この時が初めてになると思います。

つまり、この都市デザインフォーラムでは、そういった都市デザイン室の次の地域展開戦略みたいなものと併せて、市民活動というものにもスポットを当てて事業を展開した、ということになります。

市民まちづくり推進担当を設置

この都市デザインフォーラムの地域展開型事業が終わった後、平成4年(1992)に都市デザイン室に市民まちづくり推進担当ができます。私はこの市民まちづくり推進担当を平成4年、5年(1992、1993)と2カ年担当してました。

そのような前段があつて、都市デザイン室に市民まちづくり推進担当ができて、私が当時、ちよつと不思議だなと思つたのが、「地域まちづくり」推進担当ではなくて、なぜだか「市民まちづくり」推進担当という部署になっていたことです。「これは、どうしてだろう」と思つたのですが、地域まちづくりの「地域」という場所ではなくて、「市民」と明言したことによって、結果的には、市民が主役になるようなまちづくりや、そういう仕組みを推進していく、ということが主眼となつた。それまでやっていた都市デザイン室の、具体的な場所づくりというか、ものづくりというところから、ちよつと離れたような形になりました。振り返って考えると、市民まちづくり推進担当が都市デザイン室にできたことは、その後の展開にとって非常に大きいターニングポイントだつたな、と思つています。

本来は、先程紹介しました「地域集積型事業」を実現する、つまり、いろいろな事業を一つの地域にワツと持ち込んで、それを市民参加でつくり上げていこう、というものを狙つていたと思うのです。

自主的なまちづくり活動を支援

そんなことを考えつつも、実際に、市民まちづくり推進担当で何をしたいか、ということを考えてい

土井一成
小沢朗

今井信一
堀勇良

小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

図7：保土ヶ谷宿場まつりの様子
資料提供＝横浜市



た時に、都市デザインフォーラムではいくつかの活動を支援して、その成果も具体的にあったわけですが、よくよく考えてみると、それらは非常に厳選された活動でした。この都市デザインフォーラムの時に支援をした団体は、鶴見川のTRネット（鶴見川流域ネットワーク）や、まいおか水と緑の会など、それまでに随分実績を重ねてきたグループをあえてセレクトしていました。保土ヶ谷宿場まつり【図7】をやっている保土ヶ谷宿400倶楽部もそうですね。あと南太田のワークショップも「南太田ワークショップの会」として支援しました。活動歴は浅いけれども、行政ががっちり組んでやっているとこです。このように見ていくと、これらの活動はレベルが高く、一般的な市民と差が大きいと感じました。そのため、いきなり具体的な制度づくりとかに行っても、なかなかうまく行かないのではないかと、こういう自主的なまちづくり活動をもう少し社会的に広めていく、認知をしてもうとこが大事なのではないか、と思いました。

そう思ったもう一つの要因は、行政側も市民側もそうなのですが、そういう自主的な市民活動に対する評価が結構低かったからです。当時の評価は「任意団体なので、継続性がいつまであるかわからない」「運営体制もちゃんと組織化されているわけじゃなくて、非常にもろい」「興味のあるテーマしか活動しない」。当たり前なのですね、それで集まっている人たちですから。「まちづくりというのは、もつといろんなものを取り込んだ幅広いものであるの、まちづくりとは言えないんじゃないか」。地域外から、そのテーマに興味のある人がやってきて活動するので、そこに住んで

いる人にとってはあまり面白くなかったりする。外から来た人が勝手なことをやっている、そういうような見方もありました。

こういうことが結構ありまして、当時の、市民まちづくり担当のミッションー当時、そういう人たちは「テーマコミュニティ」という呼び方をしていたのですがーテーマコミュニティもまちづくりへのパートナー、担い手になりうることを社会的にもっと広めていこう、ということミッションの1番目にしました。これがその後の展開に大きく響いてくるところでですね。

市民活動の社会的気運を盛り上げよう

市民まちづくり推進担当の「人選」について。担当になったのは内藤恒平さん、園部弘明さん、倉村秀朗さんと私です。内藤恒平さんは今、環境創造局でみどりアップ推進担当理事をやっていて、赤レンガ・ネットワークなどの活動でも全国的に有名な方です。当然、赤レンガの活動をバリバリとやって、事務局長という肩書きを持ってやっていました。園部さんも今、環境創造局に在籍しておりますけれども、川の関係の活動、川を考える会で活動したり、各地域のいろんなまちづくりにも関わってきた、まさに活動を実践する人です。しかも園部さんを除いて3人が造園職、という都市デザインの中では異色なメンバーでこの事業を実施していました。そうなってくると、この人選がこの結果を招いたかな、と今では思っています。

中心でやっていた内藤さん、園部さんは、自分自身が市民活動を実践してやっていますので、その辺の問題点とかも非常によく分かっていました。これはもう少し、しっかりと社会に根付かせていかないと、その先の展開は難しい、と考えていました。この担当である私たちは、実験的に市民活動を支援しつつ、そういう活動の社会的な気運を盛り上げていく、というやり方で行こう、と考えていました。

もう少し細かく見ていくと、地域まちづくり推進事業というのがありました。具体的に市民活動を支援しながら、次の施策を練っていくわけですが、一部の特殊解にたくない、という思いがありましたので、ま

ずは区役所をお願いをしまして、全区必ずどこかの活動団体を推薦して、とお願いをしました。これは区役所にも関わりをもってもらう、ということと、全区なので、「うちのところは関係ない」ということではなく、市全体、全区で盛り上げていく、という意図です。担当が3人しかいなかったのですけれど、とにかく全部やる、ということでやりました。

これは区全体を巻き込んだので、その後、結果としては、市の内部にはかなり大きなインパクトを与えた、と思っています。賀谷さんの話にも出てくるかと思えますけれども、その後、パートナーシップ推進モデル事業などでまた全区展開する、というところにつながっていった。ここでは非常に無理をしつつも、全区、18区お付き合いをしたのはよかつたかな、と思っています。

団体の一員となって内部を見る

実際の事業としては、大きな資金面の支援と活動面の支援を、かなり徹底してやりました。実験なので、都市計画局の事業ですけれども、かなり幅広く捉えて、福祉の活動なども含めて支援をすることにしました。まちづくりは、どう転んでどこにつながるかわからない、ということで、活動のメインの趣旨が福祉のまちづくりだったり、地域給食のようなことでも、まちづくりにつながる、ということで支援をしていきました。

なので、助成金を出す時には、ものすごく苦労しました。例えば、活動が女性ばかりなので、男性も増やしていきたい。そのために男性の料理教室をやるので、それに支援してほしい。それを都市計画局の助成金でやりました。これはその後の活動につながるから、と説明して、理解してもらいました。

活動面の支援は、市民団体の一員として入り込んで、内部から観察をしていく、ということをやりました。今思うと、よく体もつたな、と思います。本当に一員として加わって、代表と会計以外は何でもやる、という感じでやっていました。夜の打ち合わせにも参加したり、地域のイベントをやる時には行きますし、その準備も一緒にやりました。

私は絵とかイラストを描くものですから、会報のイラストを描く、ということもやりました。何が支援になるのか、とか、どういうことで市民活動を支えていけるのだろうか、ということを考えてながらやっておりました。

私自身、やっている最中は周りがよく見えない状況になってしまい、今思うと大きな反省点ですね。もう少し冷静に見る目がないと。こちらは支援先や支援内容などを今後、考えていかないといけない、ということがあるので、いい面も非常にあったのですけれども、反省点でもありました。本当に、ほかのことが何も考えられなくなってしまうのですね。一度に五つも六つもそういう団体とお付き合いして、その活動メンバーとして中に入っていくのは無謀でした。もう少し冷静にやれたらよかつたな、と思います。

市民まちづくりフォーラム

その後、平成5年(1993)に、市民活動支援の集大成、ということで「市民まちづくりフォーラム」をやっております。以前の都市デザインフォーラムの時にしてお付き合いをした5団体を加えて、18区の18団体プラス5で23団体について、今までの成果とか、こういう活動がこんなまちづくりにつながっていく、ということ世にアピールするため大々的にフォーラムをやりました。

フォーラムの当日は単なる会議、発表だけではなくて、盛り上げの趣向として、イベントなどをやりました。パシフィコ横浜の円形の中庭で模擬店を出したりしています。これも参加した市民の方たちがみんな企画をして、自分たちでその実施をする、ということでもやりました。

フォーラムの企画運営会議には、参加した23団体の方が皆さん集まって、どういうフォーラムにしているか、どんな分科会を仕立てて、どんなことを発表しているか、ということをや夜な夜な議論しました。市庁舎にある大きな部屋に毎回集まって、早くても終電まで、遅いと終電もなくなって、みんなどうやって帰ったんだろう、ということを繰り返して企画を練って、それでこのフォーラムを実施をしました。

土井一成
小沢朗今井信二
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

フォーラムをやってみてどうだったか、というところでは市民側、参加した団体の方には非常に大きなインパクトがありました。ただ、市民全体では、360万人いますので、そういうもの全体にインパクトを与えるのはなかなか難しい、というのが実感でしたけれども。参加した団体には非常に大きな転換点だった、と聞いています。

この当時参加した人で、今でも第一線で活動している方は、横浜シティガイド協会の嶋田昌子さん、瀬谷の長屋門公園で活動している清水靖枝さん、ドリームハイツの活動でこの事業に参加をした松本和子さんは、その後市民セクターよこはまへ、自分の活動からさらに中間支援組織へと転身し、活動を広げていきました。それぞれの活動も、名前は変わったりしつつも、発展的に今も行っているものも結構あります。半分以上は何らかの形で続いているのではないかな、と思いますね。

市民側はそうですけども、私は、行政側にとってのインパクトが結構大きかったな、と思っています。都市計画局自体もそうなのですが、当時はまだ、こういう任意の活動に対する理解が十分でなかった市民局などに対しても「これはやっぱり、次のまちづくりなどにつながっていくな」と感じてもらえた、という成果があったと思っています。

市民活動担当は企画課が引き継ぐ

都市デザイン室は、そのフォーラムの後、どうなったか。都市デザイン室は平成4年、5年(1992、1993)と市民まちづくり推進担当を設けましたけれども、この2年間で終わっています。「市民まちづくり担当の最終アウトプット」は、市民まちづくり会議の設置、市民活動の支援、まちづくりセンターの設置、草の根対応型の行政機構の四つです。

この事業を次に具体化して発展させていくところは、もう都市デザイン室ではなくて一当時も一緒にやっておりましたけれども一企画課、当時、企画調査課という名前でしたけれども、そちらが引き継いでいくこととなります。都市デザイン室はその後も、地域

集積型事業や次の市民まちづくりを、都市デザイン室の大きな柱として展開していくことには、結果的になりませんでした。

「市民まちづくりノート」

最後に、市民まちづくり推進担当で発行した「市民まちづくりノート」という冊子を紹介します。

当時、いろんな市民活動を支援していくため、いろいろな話を聞いていくと、いろんな課題がある。場所がない、仲間をどうやって集めたらいいだろう、まちづくりではやはり、役所との関係が大切になるのだけれど、そこでどう話したらいいかわからない。そういういろんな悩みがあつて、そのことでいろいろ議論していたことや、その時に出てきた答え、でもないのですけれども、そういうものを集めて、「キーワード集」のような形で発行したのがこの「市民まちづくりノート」です。

その中に「キーワードコラム」というのがあって、その文字のところどころに赤字が入っていて、その赤字をたどると、別の項目で、その項目がある。分かる人はいるかもしれないのですが、クリストファー・アレグザンダーの「パターン・ランゲージ」を当時、せっせと読んでいたのです。一つのコラムの中に出てくるキーワードが、ほかのところの見出しで、そういうものが連鎖する、という手法です。この本1冊全部、ところどころ赤字があつて、それらがどこかでまた、キーワードとして登場して解説されている、というようにつくりになっているものです。

そういう小技が利いているのです。こんなものも出しながら、実験的に市民活動を支援していった、というようなところですね。

今は「市民まちづくり」より、「市民活動支援」というものがいろんな形で盛んになっていますし、定着しているように思うのですけれども、今、私は公園の部署にいます。公園はワークショップなどが盛んになっていくきっかけのところですが、現状を見てみると、実はほとんどやられていません。市民参加がないわけ

ではないのです。新しい公園などを造るより、再整備やメンテナンスの時代になった、ということかもしれません。公園などでは、みんなで考えてプランを作っていく、ということがなくなってきた一方、市全体を見れば、市民活動も盛んになってきているので、まちづくりの部分では随分変わってきたな、と実感しているところです。

そんなところで次、賀谷さんにバトンタッチしたいと思います。

賀谷：網河さんは技術屋さんで、ちゃんと都市デザイン室でやっているのですが、私の方は事務屋で、もっぱら市民参加ということを考えて仕事をしていたので、空間的にどうこう、という話は出ないのですけれども、続けてのところで話したいと思います。

この講座の第1回目に鈴木先生から「暗黙知」の話があり、それを聴いて、私がやった仕事そのものの話、前段で私が一市民として、というか、仕事に関係なく市民活動に関わっていたところが結構大きかったな、と思ったので、その話をまずします。「鶴見川を楽しくする会」という会に入っていて、鶴見川の「いかにフェスティバル」のためのいかに作り毎年、参加して、大変な思いをしながら、でも、楽しくいかに作る、という活動をしていました。

網河さんからお話がありましたように、平成6年(1994)に市民まちづくり担当が都市デザイン室から企画調査課に移りました。私は企画調査課に、その翌年の平成7年(1995)から10年(1998)までいました。

川を考える会と鶴見川を楽しくする会

平成6年(1994)までは何をやってたかと言うと、昭和61年(1986)に役所に入りまして、鶴見区の総務課に配属になりました。程なく、「よこはま川を考える会」という会に入ります。川づくりに関わる市の職員が中心となった会なのですが、大学の先生やコンサルタントさんなどいろんな人たちがいて、毎月、定例研究会をやっている、という会でした。

そこに私も入って、面白いなと思いつついろいろ

話を聞いていたのですけれど、そのうち、昭和62年(1987)に「鶴見川を楽しくする会」が新しくできます。この頃ちょうど、毎月勉強しているだけでなく、私もどこかにフィールドを持ちたいな、と思っていたので、自分が住んでいる—その頃、磯子区洋光台ですけれども—磯子区の方がいいのかな、それとも、勤務先の鶴見の方がいいのかな、と思っていたら、「鶴見川を楽しくする会」ができたので、そこに参加し始めました。

この頃、いかにフェスティバルを鶴見区が始めました。この頃の区長が、鶴見川を区の重要な資源の一つとして、こういうお祭りをやろう、と言って始めたのです。そういうこともあったから分かりませんが、区役所では区政推進課の企画調整係というところがまちづくりの担当で、「まちづくりの話をちゃんとできる市民団体があるといい」と思っていたようで、そういう時に「鶴見川を楽しくする会」ができたので、区役所の企画調整係が結構、この会に出ていました。

この会のヘッドが実は千代田化工建設という鶴見の大手プラントメーカーの総務部長の、草野(重芳)さんという方でした。ほかのメンバーも、企業人の集まり、という感じで、言ってみれば事務方の下支えみたいな人はあまりいなかった。その当時の企画調整係長から—私はしよつちゅう企画調整係に出入りしていたので—「賀谷さん、草野さんをフォローしてもらいたいんだけど」と言われたのです。ちょうど、鶴見で活動しようか、それとも磯子で活動しようかと思っていたところだったので、「分かりました」と言って、同期が企画調整係にいまして、二人で割と事務的なことを「楽しくする会」でやっていました。

ネットワーキングフェスティバル

そういうことで、「鶴見川を楽しくする会」に入って、毎年いろいろと、いかにフェスティバルに出たりしていました。鶴見川ネットワーキングフェスティバルというのが、平成3年(1991)から4年(1992)にかけて(平成3年度)にあったのですが、これは先程の網河さんの話の、第1回の都市デザインフォーラム、地域展開型事業として支援されていた活動で、「鶴見川を楽

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

しくする会」は、そのフェスティバルの中心的なメンバーになっていました。都市デザイン室の担当は先程名前が出た「よこはまかわをを考える会」の園部さんです。この辺に来ると、仕事なのか、市民活動なのかよく分からない、みたいなこんなところで都市デザイン室の人がやっていた、ということがありました。来週、この講義に来る宮澤好さんも「かわの会」の人ですね。

それで、「鶴見川を楽しくする会」がこのネットワークフェスティバルの中心だったので、必然的に私はその事務をやることになりました。

このフェスティバルは、複数の団体がやっている活動をつないだものです。その頃ちょうど、鶴見川の流域にいろんな団体がぼつぼつでき始めて、団体同士の間でも交流がちょっとずつ始まりかけていたところでした。どこかでネットワークフェスティバルのようなイベントをやっているところがあって、園部さんが、その手法で、それぞれがやっているイベントをつないでみたらどうか、という話を持ってきて、それはいいね、ということをやったので、この時はまだネットワーク組織ができていたわけではないのです。これをやることで、1年間通して、ネットワークフェスティバルということで、源流から河口までの複数の団体のイベントをつないで、全体を見せたのです。今はNPO法人TRネット（鶴見川流域ネットワーク）になっていますけれども、そのスタートです。TRネットはつい先日、20周年の行事がありましたけれど、この時が始まりでした。

まちづくりフォーラムで盛り上がる

先程話があった市民まちづくりフォーラムは、こういう団体が集まってワイワイガヤガヤやっていて、私は出ていないのだけれど、草野さんが企画運営会議に参加していましたので、間接的に話を聞いていました。何かものすごいことになっているらしい。毎晩、終わらない、どんどん人も増えるし、やけに盛り上がっているらしい、と聞いていたのです。当日は私も行きまして、やはり、かなりの盛り上がりでした。

この頃、「かわの会」などに出てもそうだったのです

けれども、何かのテーマで活動している団体は、それだけでやっていると、地域ともあまりなじみがないし、ちょっと孤立というか、寂しいわけではないのだけれど、自分たちがやっていることがまだあまり認知されてない、という状況だったと思うのです。それが市民まちづくりフォーラムみたいに集まってみると、こんなに頑張っている人たちがいっぱいいるんだ、というのがよく分かって、みんな、自分の活動に自信も持ったし、さらに頑張ろう、となったのかなと思います。

そこで人のつながりがすすんでくれたのですけれども、これの後をどうするか、というのが市民側からはよく見えなかったのです。

市民グループの「地図博物館」

このフォーラムに関わって、同じ支援を受けていた団体でSKOP、新金沢発掘隊というのがありました。これの中心は市大の、村橋(克彦)先生ですね。その頃、金沢区にいた関口さんと言う職員が中心になって、市大の学生さんたちとか、市民と一緒に、金沢を発見しながらまちづくりを考える、というような会をつくって、これもよく考えると、内輪(市役所)の人間が支援される側にいたのです。

SKOPには綱河さん、関わっていませんか。

綱河：やっていました。

賀谷：そこで地図を作っていたのです。それができて、どうしようか、という話があったようです。その頃、いろんな市民グループの中で地図づくりがすすくはやっていて、TRネットも作っていました。私も、最初の頃、すすく苦労して作ったのを覚えています。「やっぱり、フィールドをちゃんと見なきゃ」という考え方があって、みんなで歩いて、いろいろ出だしたものを地図にして、地図の形で一般に出していくことで、さらに理解してもらおう人を増やしていきたい、というような思いがあって、結構、いろんな地図ができていたのです。

それで「市民まちづくりフォーラムはその後、どうなるのか」ということと、その中にいっぱい地図づくり

をしていたグループもあったので、これを集めてフォーラムやったらいいのではないかと、村橋先生と関口さんが語らった、らしい。ということで「横浜地図博物館」というイベントを平成7年(1995)1月にやりました。

その記録集の表紙は、網河さんが描いたのでしょうか。

網河：表紙は僕ではないですが、中の絵は僕です。

賀谷：その記録集は、網河さんが記録係で、2年がかかりくらいで作ってくれたものです。

地図博物館は、全くの市民の手でやりました。最終的に市大のお金は入っているのですが、声掛け、声掛けで、そういう地図づくりをやっているグループが集まりました。私も関口さんから「市民まちづくりフォーラムがあったけれど、その後どうなるのか分からないし…」というようなことで声を掛けられ、参加しました。最初、「本番を10月にやろう」と考えたらしいのですが、みんなであんまりあだ、こうだとやっているの、1月に延びてしまいました。私は、みんながやっているのを「面白そうだな」と思っていました。今回、この話をするのでいろいろ振り返っていたら、すごく楽しくなりました。

場所は、横浜市大がポートサイド地区にもついていたアーバンカレッジというところを使いました。ここで地図づくりのグループが一緒になり、みんなでいろいろ議論をして、「地図から広がるまちづくりストーリー」というものを作りました。これも、網河さんが整理してくれたのですよね。「地図からまちへ、まちから地図へ」ということで、みんなでまた地図をつくって、またまちに帰って行って頑張ろうね、みたいな感じで盛り上がったのです。私も網河さんも全く仕事ではなかったのですが、やっていました。網河さんとはその頃からのつき合いです。

企画調査課の市民まちづくり担当

同じ平成6年(1994)度に、地図博は平成7年(1995)1月ですが、同じ年の3月にまちづくり市民

フォーラムがありました。先程は「市民まちづくり」フォーラムで、今度は「まちづくり市民」フォーラム。それを都市計画局でやることになり、市民まちづくりフォーラムに関係したメンバーが集められることになります。

私はそれにも出ていないのですが、草野さんから話を聞いて、「何で、この間やっただけなのに、また同じようなことをやるのか」と疑問に思いました。ちょうどその頃、私は鶴見区役所に9年もいまして、もう異動しなくては行けない、という時期だったので、次、どこに行こうかなと思っていたのですが、みんなだったか、関口さんからだったか「賀谷さん、都市計画局に行けばいいじゃない」という話になって、すっかり自分もその気になって「よし、じゃあ、行こう」と思って「私、都市計画局の企画調査課の、市民まちづくり担当に行きたいんです」という異動希望を出しました。

行ってみたら、平成7年(1995)3月のフォーラムは、実は都市計画局と市民局の共催で、いわゆる地縁系の団体である自治会町内会と、テーマ系の市民グループをつなげていきたい、という思いでやっていることが分かりました。いろいろ深い考えがあったのですね。これはその頃から今に至るまで続いている、永遠のテーマです。

「まちづくりセンター」をつくりたい

企画調査課で仕事は、何をやっていたのかと言うと、平成6年(1994)度まちづくり活動システム検討調査、平成7・8年(1995・96)度まちづくり活動支援システム推進調査、これは建設省の補助でやったものです。「市民まちづくり活動をどう支援していくのか」を考えるための調査です。先程、網河さんの「アウトプット」の話で出てきた「まちづくりセンター」をどういうふうにつくっていくのか、というのがメインのテーマでした。

その頃、都市計画局の小沢局長が、先程の市民まちづくりフォーラムの最後の時に言ったことで、私はあまり覚えてないのですが、草野さんから「小沢さん

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

VII

都市デザインと市民参加

が、まちづくりセンターをつくりたい、と言っていた」と聞きました。この時、既に、環境保全活動センターの検討が進んでいました。環境保全局が活動団体を支援していて、草野さんは環境保全活動支援センターの検討にも関わっていたので、「今度は都市計画局もそういうのをつくりたいらしいよ」という言い方でした。今の環境保全活動センターは、その頃、構想された形のものとは変わっています。

その後、私は異動したので「じゃあ、市民の人と一緒にこれを考えていこう」ということで、まちづくりセンター検討会というのを平成7年(1995)に始めたのです。この時、先程から何度も話が出ている村橋先生、横浜シティガイド協会の嶋田さん、それからずっとお付き合いいただくコンサルタントさんら、核になる人たちと延々と話し合っていました。一応、平成6年(1984)度に都市計画局と企画調査課の私の前任が、まちづくり計画の基本構想素案のようなものを作っていて、そういうものを出しながらみんなで考える、ということをやったのです。

村橋先生にひどく怒られる

その1回目に出した資料が、まちづくりセンターのイメージで、市レベルを中央に、その下に区レベル、地域レベルという絵を描いて、そのまま出して話をしました。私は、先程も話したように、村橋先生ともほかの皆さんとも、本当に市民同士でずっとやってきて、仲間みたいな人たちと、今度は仕事の立場だけれど、非常に和気あいあいの雰囲気、という気分でしたのですけれど、その資料を見て、村橋先生がものすごく怒ったのです。「これは何だ」という感じで。「何で市が上にあるんだ。中央が先なんだ」と。中央指向、中央目線と言うか、上から目線と言うか。言われて「あっそうだな」と思ったけれども、かなりショックでした。

ショック、というのは何かというと、自分は市民側でやってきて、市民目線でやっていると思っていたにも関わらず、そういう資料を出してしまったことです。「しょうがないな、怒られても」と言うか。局に行つ

てしまうと、知らず知らず、そういう考え方をしてしまう。「こんなに市民側でやってきたのに」という思いがすごくありました。だけれども、これはとてもありがたくて、その後もずっと村橋先生とはいろいろ議論しながらやらせていただいたのが、とても印象に残っています。

その後も検討会では、まちづくりセンターってどんなの?いいの?というような話とか、具体的に、それぞれの活動をもつてきてもらって、それについてみんなで悩みを相談しましょう、というのをやったりしていました。

地域を横につないで「ひと・まち横丁展」

そういう形で検討会やっていて、平成7年、8年(1995、96)は、どういふふうに活動支援するのかを、市民の人と一緒に議論しながらやっていたのですけれども、平成8年(1996)には情報交流機能みたいな、まちづくりセンターの機能を実行しよう、ということで、そのネットワークづくりをやってみよう、ということで「ヨコハマひと・まち横丁展」というのをやります。今までやっていたフォーラムみたいなものです。

これがまた、市民まちづくりフォーラムからの流れのメンバーがみんな入って、ああだこうだと議論するので、市民まちづくりフォーラムの企画会議には、人数などでちよつと負けるかもしれないけれども、でも、延々と夜、おにぎりとお茶とお茶でずつとみんなが議論して企画したのです。

この頃、ちょうど、テーマごとのネットワークが結構出来てきました。川グループは川グループでネットワークがだいぶ出てきていましたし、森の活動グループもだいぶ出来てきていましたし、福祉の方は福祉のまちづくり条例を作る、というのがあって、「テーマごと」はだいぶ分かってきたけれど、「テーマごとを、地域で横につないでいこうじゃないか」—これはみんなが考えたことす—ということで「ひと・まち横丁展」ということになりました。

横丁というのを、エリアを北部と中部と南部と西部に分けてつくったわけです。例えば「南のまち緑と水

の横丁南部」とか「中・港横丁中部」とか、「街道のまち
タンポポ横丁西部」「丘と川のまち菜の花横丁北部」、
この名前もみんなが付けているのですよ。こういうの
を作って、そこにテーマではなくて、福祉の団体もあ
れば、緑の団体もあれば、というようなことで一緒
に入ってもらいました。そうすることで、それぞれのつ
ながりをつくっていかうとしたわけですね。

「まちづくりセンター」のつもりなので、相談所みた
いなものも一緒に設けて「何か相談があったらやりま
す」とか、井戸端談義ということで、どういふふう
に活動を進めていくのかを議論する会場をつくつたり
しました。あと、中でガイドツアーをやつたりしまし
た。

この時、「大福帳」という、活動グループの紹介の冊
子も作りました。それを見ると、アナログ手書きです
ごいのですけれども、活動グループ150ぐらい、それ
に関連するような市民参加的な事業50と、いろん
な助成事業とか、まちづくり都市100選みたいな内容
を付けて作りました。

それと一緒にこれもみんな議論してやつたこと
なのですからここからそれぞれの方面ごとで、
ネットワークをみんな進めていこうよ、ということで
「ヨコハマ人・まち輪づくり連をつくりましょう」という
「ネットワーク宣言」のようなことをやりました。それ
で世話人を4人、先程の嶋田さんや村橋先生達で作
りました。

ただ、先程の網河さんの話にもありましたけれども、
続けるのは難しいことでした。検討会では交流への
希望が相当あったのですけれど、ひとしきりやつて
きて、いざ地域ベースで、となると、日常的にはそん
なに交流のモチベーションはないのですよね。その後
もずっと情報誌などを作りながら4方面のネットワ
ークを意識はしていましたけれども、最終的には消え
ました、北部はかなり頑張っていましたけれども。

まちづくりセンター基本構想

こういうプロセスの中で、まちづくりセンターの六
つの機能みたいなものを整理して、大上段ですけれ
ども「基本構想」と言って作っていました。

次に平成9年(1997)年から10年(1998)にかけ
ては、まちづくり活動支援に取り組めます。基本的な構
想を作ったから、実際の支援の事業をやっていきます
よ、ということで始めたのです。基本構想検討懇
談会は「まちづくり推進会議」という名前に変わります。
最初の年は準備会で、次の年は推進会議です。これ
は先程の網河さんの「最後のアウトプット」に出て
きた「市民まちづくり推進会議」を受け継いでいる、と
いうことですね。

それで、具体的な機能を実践していきましょう、と
いうので情報誌『ヨコハマひと・まち創刊号』を作り
ます。この編集には、誰が来てもいいよ、と関心のある人、
10人ぐらいで、結構、入れ替わり立ち替わりがあつた
のですけれど、いろんな人に参加してもらいました。

紙面構成は、最初は既存市街地のまちづくりとい
うことで、日向山。最初のところは建築協定とか地区計
画とか、ちょっと建築局マターつばいまちづくりを取
り上げています。平成9年(1997)度はテーマごと
にやっています。そういうテーマに合っているよ
うな事例を紹介しながら、都市計画のキーワード、例
えば用途地域や容積率を紹介する。さらにコーディネ
ーター派遣といった支援制度も紹介する。事例紹介
と一緒に、それに関わる支援制度や用語の解説を
セットでやっています。これをテーマごとに積み重ね
ると、何かまんべんなく使えるものになるのではない
かな、ということで作りました。最後のところは、その
時々に関連するイベントや助成金の情報を載せてい
きましょう、ということにしました。

平成9年(1997)度はそういうテーマごとをやつて、
10年(1998)度は今度、どうしましょうか。これもメン
バーで話をして、テーマごとをやつたら、これからは
地域の総合的なまちづくりだから、と「総合的なまち
づくり」をテーマにしました。「地域の総合的なまち
づくり」という言葉はこの頃から使っています。

それで「地域の総合的な」と言ったら、まず町内会
だ、みたいな感じで、第7号、平成10年(1998)度の最
初は、町内会を特集してみました。町内会の紹介、つ
まり、地域で一番重要な地域のまちづくり団体になり
うるところとして町内会を紹介しました。

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

VII

都市デザインと市民参加

第2回都市デザインフォーラム

この年に、都市デザインフォーラムの第2回が開かれましたので、その後は、こちらにシフトしていきます。この第2回横浜都市デザインフォーラムは、そもそも市民まちづくりという発想が1回目の都市デザインフォーラムで出てきたので、「じゃあ、私たちはどういふふうに参加しようか」ということで「市民まちづくり会議」というのを都市デザインフォーラムの中でやりました。ここもまたまた実行委員会で何をやるか、ということを経験して、決めたテーマが「地域活動をまちづくりにつなげる」です。

ここで大きく、市民参加のステージが変わっているのが分かります。それまでは「市民参加」でしたから、何か行政側がやっているものに市民側が参加してくる、というスタンスなのですが、ここから市民側が発意してくる、その市民側が思っていること、地域から出てくるものを、どういふふうにまちづくりにつなげていこうか、ということを考えなければいけない、そういうステージだ、という意識だったのです。そこから先がまだあまり動いてないかな、というのはありますけれども、明らかにステージが変わってきたのが今、振り返れば分かります。

これと並行して、パートナーシップ推進モデル事業という、横浜の市民参加を考える中では非常に大きな事業があります。この辺の大きな流れを表した年表を『調査季報』という政策研究誌に載せました。『調査季報』は私が前にやっていた仕事です。

これの166号は「協働から地域運営へ」、私が特集した最後の号なのですが、ここに載せた年表を見ていただくと、都市計画局がずっとどんなことをやってきたのか、という流れが分かります。

パートナーシップ推進モデル事業は平成7年(1995)の市民参加推進プロジェクトから始まります。この頃は高秀市長で、当時、「市長が何か、市民参加の分かる人たちが集める、と言って、何かやるらしい」と聞きました。それで始まったのが市民参加推進プロジェクトです。

『調査季報』を作っている主任調査員の中川さんという方がいます。コミュニティーや市民参加、協働を

見ている人、といったらもう中川さん、という感じです。ずっと調査研究をやってらっしゃる方で、今、再任で政策局にいらっしゃいます。

中川さんがいて、内藤恒平さんが入って、市民局と企画局と都市計画局の3局の係長さんたちが週に1回ぐらい集まり、これをまとめて平成8年(1996)度からパートナーシップ推進モデル事業というのをやりましょう、ということになり、それに関わったので、非常にいい経験をさせてもらいました。

市民活動支援センターが誕生

参考に、その頃市民局はどういうことをやっていたのか、という話もします。

高秀市長は市民参加について、市民活動をどういふふうに支援するのが行政としていいのか、というのを有識者の人を集めて整理させていました。平成9年(1997)10月に横浜市市民活動推進検討委員会、堀田力さんが委員長でやっていらして、そこがまとめた「横浜市における市民活動との協働に関する基本方針」—「横浜コード」と言われていますが—をまとめています。これは単なる提言で、平成12年(2000)には条例化されて、市民活動推進条例となります。

ここで話が12年に行きます。まちづくりセンターをずっと検討していたのですが、いきなり、横浜市の市民活動支援センターができました。平成14年(2002)に中田市長になってから、「協働」とよく言われるようになり、その動きが平成16年(2004)の協働推進の基本指針という形でまとめられました。この前後に、先程、市民参加から市民提案が変わった、と言ったことと関連しますけれど、提案型の事業などがいろいろ、ぼつぼつと出てきていて、今に至っている、ということです。

パートナーシップモデル事業の事例

話をパートナーシップモデル事業に戻します。このコンセプトは「市民と行政のパートナーシップによる地域まちづくりの推進」です。モデル事業の目標としては「区役所のまちづくり機能を高める」として「市民

が自主的に地域を運営していく力を高める」。この2番目は、まさに今私がやっている市民局の仕事と同じような表現です。3番目は「市民と行政がパートナーシップの関係を築く」ということです。

これは1区2カ年で、18区で25のモデル事業を実施しています。先程、綱河さんの「3年間で」というのに比べれば少ないのかもしれないし、担当も3局にわたり、ほかの仕事もしながら、という中で、25の事業に、担当なり係長なりがかなり密接になって一緒にやっていました。大きくは施設系とプラン系と支援系のように分かれていました。

ここでやったことは、従来、決まった人たちが参加してくる、いわゆる町内会長さんや地域の委員さんが中心となる市民参加ではなくて、一部「公募制」という開かれた形で、「参加の機会を開く」という言い方をしていましたけれども、そういう市民参加で、やり方もワークショップ形式です。前から都市デザイン室がやっていたので、特に新しくはないのですけれども、一般化されてなかったところを、モデル的にやっただけ。しかも3局それぞれしっかり入りながら、検証もして、最終的には「パートナーシップ推進マニュアル」という形にまとめています。本当は、パートナーシップの推進の要となるような部署ができればよかったのですけれども、そこまでは無理でした。

この時、私は、蒔田公園の再整備に関わっていました。蒔田公園には野球場があったのですけれども、今はないのです。いろんな市民の方たちが入って、どういう公園にしたらいいか、というのを2年間、議論して、新しくしたのです。

南区は、この公園づくりだけではなくて、子育て支援と、ボランティアフォーラム南という3本の事業をやっている総合モデル区で、3本を連携させながら、区トータルでパートナーシップを進めましょう、ということをやっていたので、子育てに関わるお母さんたちとか、福祉のボランティアに関わっている拠点の方とかと一緒に入ってやっただけです。それと、野球場を利用している地域の野球協会の人も入りました。

だから全然利害が一致しない。子育てとかボランティアの方たちはやはり、子どもを連れて安心して遊

べるような公園が意外とこの辺にない…。ボランティアフォーラム南の方たちからは、高齢者の人たちが身近に憩える場所がない、と。野球やっている人たちからは「野球やっている場所がないんだ」。それで話し合いをやってうちに「だけど、野球をやっている人って車で動けるじゃないですか」みたいな意見も出る。ということは何回もやりながら、まとめたのです。

この時は試行錯誤だったので、毎回、その場で参加申し込みをしてもいいですよ、とやっただけで、話が何度も元へ戻ったりして大変だったのですけれど、とにかく、とことん話せば何とかなるのではないかと、何か信念みたいなものが私にはあったのです。緑政局の人とコンサルタントさんと区役所の企画調整と一緒に議論する中で「まあ、もうちょっとやりましょう」みたいな感じで、延々と話をさせていただきました。

結果的に最後の方で、野球協会の人折れたのです。いろいろやっていると、雰囲気的には「やっぱり野球はほかでもできるじゃない」となる。けれども、自分の後ろに野球をやっているチームがいるわけですから、簡単には変えられません。最後の最後に、団体として言ったわけではなくて、その人個人として、ですけれども、「まあ、ここに野球場がなくてもいいか」というようなことを言ったのです。私は思わず涙が出るほど感動しました。

これが何か、私にとって、村橋先生に怒られたことと併せて、もう一つ大きな「市民参加を信じる」ということの原点になっています。

このパートナーシップ推進モデル事業もすごく盛り上がり、さらに各区の担当者と一緒に、研修も何度もやりました。それぞれの施設系だとかプラン系だとか、似たような事業の担当同士が集まって「こういうのは大変だよ」「あーだよ、こうだよ」と。しかも、関わっていた市民の人と一緒に呼んで研修やっているので、どうやっていきましょうか、という話を、かなり開かれた形でやっていました。

パートナーシップから協働へ

最後は、ではその後、どうなったのか、という話です。キーワードは、今まで話してきたように「市民参加」か

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

ら「パートナーシップ」さらには「協働」となってきました。中田市政の時には、市民協働推進事業本部ができたりにして、協働がフィーチャーされました。

私は都市計画局に平成10年(1998)度までいました。ちょうど、長く続いていた建設省の補助金が終わり、まちづくりセンターも、なかなかうまくいきませんでした。それで、情報誌を継続しながら自主的なセンター機能を持続させるのと同時に、パートナーシップ推進モデル事業に取り組みました。都市計画局がやるのだから、プラン系の支援をやるのがいいのではないかと、ということで、三つの事業がありました。

私はここで「市民まちづくり」をやっていましたけれども、よく考えてみると、全然主流ではなかったのですよね。主流はいわゆる都市計画事業、再開発とか区画整理とか、こちらも厳しい状況にはなっていたけれども、まだまだそれで終わらない事業はたくさんありましたし、圧倒的にそういう仕事をしている一と言うか、それが都市計画局の仕事なので一中で、端の方でやっていた。ですから「地域まちづくり」がまだ十分に理解されていなかったと思います。

その後、私は都筑区にまた6年ぐらゐ勤めて、本庁に戻ったら、今、都市計画局は都市整備局になっていますけれど、ここに、その名も「地域まちづくり課」というのができているのですよ。まさに地域まちづくりの担当ができていて、地域まちづくり推進条例までできているのですね。まちづくりコーディネート派遣制度などの支援もやっている。まちづくりセンターの検討を始めた当初、建築協定や地区計画に対してコンサルタントを派遣する、という制度があって、それはちょっと幅が狭いから、もうちょっと広げられないかな、というのをまちづくりセンターの検討と同時にやっていたのです。そういうのも見事に整理されて、トータルな地域まちづくりの支援の制度ができました。

条例に基づかないで、単純に、こういうのをやりたいな、と思った市民の人の提案を受けられるような制度として、「まち普請」というのも始まっています。もとはアントレトレンナーシップという職員提案から始まったものです。部署に関係なく、いろいろな職員が出した「こういう仕事をしたらいいんじゃないか」というアイ

デアを仕事にしていく中で、きちんと事業になったものの一つです。

なおかつ、先程話した『ヨコハマ人・まち』という情報誌が、一時、休刊していたのですが復活したのです。私はその担当の人から連絡をもらって「あれ、復活したんだよ」と言われて、すごうれしかったのです。今も過去のものインターネットで見られますし、復活したのも、ロゴとかそのままになっているので、つながっているな、というふうに思います。

「まち普請」のコンテストは大体、毎回、見に行っています。そこに出てくるテーマには最近、地域の交流サロンのようなものがあって、時代の流れが表れているのが実感できます。

市民局で「身近な地域・元気づくりモデル事業」

私は今、市民局の地域活動推進課の地域支援担当として「元気な地域づくり推進事業」名前の事業を担当しています。自治会・町内会をはじめとするいろいろな地域の人たちが、連携して地域課題を解決していく、ということを支援しましょう、という事業です。「身近な地域・元気づくりモデル事業」という事業があつて、これも平成19年(2007)からモデルとして41地区やつたのですが、いよいよモデルを終えて、通常の事業としてスタートしているところです。

事業は、まちづくりという空間的なものよりは、福祉的な活動の方が多いのです。いろんな人たちが集まって、議論して、自分たちのところをよくしていく活動を支援しているのですが、その後ろ側に局連携の場を、横連携の場をつくりたいな、と思っています。ずっとお付き合いしているのは、地域まちづくり課です。それから地域福祉保健計画という、地域ごとに地域の皆さんと一緒に考えて、作り、進めていく計画なのですが、それをやっている健康福祉局の担当などと一緒に地域支援会議というのをちょうど始めたところです。

こういうのをトータルで見えていくと、市民活動支援でテーマ系のところに光を当てたことが「市民まちづくり」の意味だったと思うのです。地域活動推進課が

担当する町内会は、市民との接点として横浜市役所の中で大きな位置を占めていますけれども、その支援とテーマ系の支援が近づきつつある。まず、地域活動推進課は市民協働部の中にあり、同じ部の中に市民活動支援課という市民活動支援センターをやっているところがあります。私は地域支援担当で、軸足は自治会・町内会にありますけれども、双方を複合させていくような支援が出来てきつつある、ということかと思えます。

林市長になってから、「協働」とことさら言わなくなりました。当たり前になってきて、前面に出す時代でもなくなってきたからかな、と思います。かつては市民との関わり、という中で市民活動の話があったのですが、ちょっと前からコミュニティー・ビジネスとかソーシャル・ビジネスというものが出来てきて、企業活動と市民活動の境目がよく分からなくなってきました。昔は市民、企業、行政と並べて「3者連携」などと書いていたのですが、そういう構図はきれいに書けなくなっている。

それと「市民と一緒にやる」ということが、都市デザイン室の仕事を見ていると分かるのですが、かつては、よりいい関係をつくっていく方向だったと思うのですが、今は、もっとシビアな生活課題に対応するもの、高齢者の孤独死とか、子育ての孤立や虐待といったことの対策にシフトしているのです。地域の中でもともとケアされていた課題が、社会的課題として出てきてしまっている、市民と協働でやらざるを得ない、あるいは地域の人たちが協働でやらざるを得ない、というステージに来ている。

そういう中で、都市デザインの流れとして来ている「創造都市」に注目しています。私が『調査季報』で創造都市を特集した時に、鈴木先生に最後に書いていただいた初寅・日ノ出町の話は、非常に大きな課題を抱えたところを、アートとかクリエイティビティーみたいなもので何とかしていく、ということがすごくチャレンジングだと思っています。地域のシビアな状況を見ていると、行き詰まり感があるのです。この行き詰まりを打破するものは、まさにクリエイティビティー、アートに可能性があるのではないかな、とい

う感じがしています。いろんなものを認めていく、とか、いろんなあり方を乗り越えてやっていく、ということにその可能性があるのではないかな、と感じています。

それから『コミュニティデザイン』という本を書いた山崎亮さんという方がいて、その方は空間づくりをずっとやってきたけれども、その空間で人が何をやるか、とか、人の関係性とかがすごく重要だと気が付いて、それが「コミュニティデザイン」という仕事として位置付けられている。市民まちづくりはこういうところなのかな、と漠然と思って、都市デザインからコミュニティデザインへ、ということもあるのかな、とちょっと感じています。

こうやってずっと見ていくと、いろいろ動いていくのがよく分かり、なおかつ、つながっていくのがよく分かります。そこがすごく面白いと思うのです。それを振り返ってみると、市民の人が先を見て答えを出してきたことが、よく分かるのです。総合的なまちづくり、今、携わっている元気な地域づくり推進事業は、総合的に地域運営をやっていく、というようなイメージですけれど、こういう言葉がもう、横丁展をやっている中で出てきているのです。やはり、現場を見ないといけないと、改めて思いました。

今はワークショップのようなことがやられている、という話は聞かなくなりました。課題がシビアになっている。区役所に行けば、虐待だとか、何だかんだと福祉保健サービスの担当が飛び回っていたり、生活保護を受ける方も増える、という中で、なかなか、昔のような、じっくりしたワークショップはできないのかもしれない。一方で、市民がビジネスとして、あるいは事業主体となって、公園の運営をやっていたり、いろんな拠点の運営をやっていたり、というステージにもなっている。だから、進んでいないわけでもなくて、かなり市民が行政のやっている公共的なところに関わっている、ということも一方であるな、というふうに思っているところです。

長くなりました。こんなところで私の話を終わります。

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

日本における市民参加の展開と横浜

鈴木：ありがとうございます。お二人のお話、特に賀谷さんのお話の中で、市民参加が都市づくりの現場、それから市民局、それから企画局といろんなところで揺れ動きながら動いてきた、というのがここまでの歴史だと思うのです。

日本全体での市民参加の流れをざっと概観すると、1970年代は公害に対する反対運動などがあつた。昭和55年(1980)に地区計画というのが都市計画法の中にできて、それに呼応するように神戸、世田谷などでまちづくり条例の検討が行われて、そこで市民参加というものができ上がっていく。特にその時には、いわゆる密集市街地問題、例えば、世田谷の太子堂とか神戸の長田といったところで、地域の中に入りながらまちづくりをやっていく、という流れも出てきた。地方都市においては、歴史や環境の保全といった運動が80年代にどんどん活発化してくる。

大都市に目を移すと、ちょうど平成4年(1992)に都市計画法の改正があつて、市民参加が半ば義務付けられたような形になり、一方で、自治体レベルの動きに目をやると、同じ年に世田谷のまちづくりファンドができた。

そういう全体的な歴史の中で見て、横浜での市民参加の取り組みを、当時、どのように考えていたのですか。つまり、横浜は市民参加が遅れている、と感じてらっしゃったのか、あるいは、大都市の中では先頭を走ろう、と思っていたのか。特に世田谷と横浜、神戸は都市デザインの分野で「御三家」みたいに言われていた部分もあつたので、対抗意識みたいなものも若干あつたのかな、と拝察するのですけれども。

網河：世田谷はほとんど全体が住宅地ですので、住民と直接向き合って仕事をしてないとまちづくりができない、ということで、世田谷では当時から住民参加がやられていましたが、横浜の都市デザイン室は、世田谷をライバル視しつつも、作戦としては、世田谷はやはり東京の中の特別区なので、権限が限られている。方や横浜は政令市なので、県並みのいろいろな力が

ある、ということで、結構、大仕掛けとしたところが多かったと思いますね。

あとは世田谷でできないもの、端的に言えば、例えば、世田谷では煙突のコンペをやりましたけれども、でも横浜ではごみ収集車をやったり、とか。いろいろ情報交換もしよつちゅうやっていましたので、ライバル視したところはあるかと思いますが。

もう一つ言えるのは、横浜は住宅地ばかりではなくて、都心再生と言うか、都心機能の強化のようなことも考えていたので、そういうところで都市デザインが活動していました。そこのところはもともと世田谷とは指向するところが違った、と思いますね。

僕がやり始めた頃は、市民参加は圧倒的に遅れているな、という印象でした。やってはいるのですけれども、それがベーシックなものになっていなかった。空間づくりがまず主体にあつて、それを実現するために住民参加が必要な場所では住民参加をする、という形でしたし、ワークショップも、やり始めた頃は、僕らが、必要があると世田谷のまちづくりセンターとかに行っているいろいろ教えてもらう、ということでやっていましたので。

鈴木：賀谷さんの方からも少し、歴史観も含めてどうですか。

賀谷：私が企画調査課に異動して、市民参加と言うか、市民まちづくりみたいなのをやっていたので、(都市デザイン室)の国吉(直行)さんに、「こういうのってどの辺から始まったんですかね」と聞いたことがあるのです。その頃、国吉さんは馬車道や元町のまちづくりを、もつぱら商店街の方たち—と言っても地元の方たちですよ—と一緒にやっている。そこで市民参加とかを前面に出すわけではないけれど、その辺りが市民参加の原点なのかな、と私は思っていたのです。

その時、国吉さんは「地元の人たちとやることで、いいものができるからやるのだよ」というようなことを言われた記憶にあります。だから、いろんな人を集めてワークショップ、というのはないけれども、自然とその現地に合った形で市民参加を、都市デザイン室は

やってきたのかな、と感じていました。

鈴木：企画調整局時代までさかのぼると、一番初めに住民参加と言えるものとしては港北ニュータウンでしょうか。

ただ、港北ニュータウンはどちらかと言うと、今で言う市民参加と言うよりは、地権者としての住民参加というイメージ、かなりシビアなものだった部分もあります。商店街での取り組みは1970年代半ばぐらいから始まりますから、ある意味、企画調整局の中では地域の住民、あるいは町方と言われる人たちと丁々発止やりながらやっていく、ということ自体は、相当にスタンダードな考え方としてあったのではないかと思います。それを郊外展開していく中で、もう少し違う形の市民参加への転換を図ったのではないだろうか、という理解をしていましたけれども、そういった認識でよいのでしょうか。今までの市民参加とは違う、という意識もあつたのでしょうか。

網河：入った当時は、僕はそれまで都市デザイン室とほとんど接点になかった、ということもありますので、それまでやってきたものを踏まえた上でやり始めた、ということではないのですね。ですから、市民まちづくり推進担当としてやり始めた時も純粋にやりました。都市デザイン室がやってきたことや、都市計画局がいろいろ展開してきたものの流れをくんで、こう展開させていこう、という意図を持ってやるよりも、まずは、今ある市民活動の現状を、純粋な気持ちで捉えて、その上で、じゃあ何が必要かな、とやったのです。だから逆に、ソフト的な展開になった。これが結果的に転換点になった、と言えます。今思えば、企画調整局時代のを引っぱり出して、たどっていたら、だいぶ違っていただろう、という感じはあります。

鈴木：賀谷さんのお話で、参加というものの自体も随分変わってきているのではないかと、というお話がありました。お話の中で触れていただいた黄金町の例などから、私も、テーマ型のコミュニティと地縁的なコミュニティをどうバランスとっていくのか、という

のは永遠の課題ではあると思うのです。横浜は伝統的に地縁型の町内会が強い。それは政令指定都市の中でもかなり強い方ですね。加入率を見ても、ほかの大都市の比べると随分高い。それは一つ、横浜の強みです。町内会はもう駄目だ、という論調もあるのですが、福祉や防災の局面になってくると、やはり、もう一遍地域に戻っていかないと、解けない問題が数多くあるのではないかな、という気もしています。

であるならば、黄金町の問題を考えた時に、町内会をベースとした町協議会というものがあるのだけでも、それをサポートするようなNPOをつくって、テーマ型と地縁型のハイブリッドのような仕組みを考えられないだろうか、と。つまり、アートをやっているのではなくて、まちづくりをやっているのだ、と。その中で、例えば、今、地域の「おばちゃん」が産直で野菜を売り、余った野菜で高齢の方、単身で暮らしてらっしゃる高齢の方を呼んで食事を提供する、配食サービスとまでは行かないのですけれども、そういった活動が出てきています。そういうものも含めてやっていくのが、何か新しいコミュニティの可能性ではないかな、ということ意識しながらやってきたのです。

そういうことを考えると、もう一遍、参加のあり方を追求していくと、いろんな可能性があるのではないかな、というふうにも思います。次に向かうべき方向性とか、次の一手として、どんな可能性が考えられるのだろうか、ということについて、お二人からご意見を頂きたいと思うのですけれども。

賀谷：今、先生が言われたコンセプトが、まさに私が今やっている仕事のコンセプトでもあるのです。理念的に描くとその通りなのですが、平成19年(2007)からやっている身近な地域・元気づくりモデル事業の41地区でも、町内会系にとどまっているところが多く、NPOが入っているところはまだまだ少ない。私は市民局に来てこれをやることで、自治会・町内会自体が非常に多様だ、ということがよく分かりました。

町内会自身でNPOをつくるところがどんどん出てきています。言ってみれば、町内会自身が市民活動的に動いているようなところがあります。だから、一概に

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

町内会とテーマ系、という構図には、もうなっていないかもしれない。一方で、旧来型とテーマ型が厳然としてあるところもあって非常に多様なので、横浜市全体として一律にこれをどう見るかは、とても難しい、というのが今の感想ですね。

綱河：私はもともと緑政局で公園づくりなどをやっていて、去年、久しぶりに公園の現場に戻ってきたところ、仕事はいっぱいあるのですけれども、施設改修や再整備と、以前から続いているものばかりで新規事業がない、というところが大きく変わっていました。

そういう中で、今ある公園を見ると、メンテナンスなどは公園の愛護会などの形で地域住民が関わっています。新たにものをつくるための市民参加ではなくて、今あるものをどう使っていくか、という形での市民参加が多くなっています。そこでは、周りに住んでいる人もいれば、例えば、トンボ池があればそういう生き物のために活動する人もいたり、と地縁系もテーマ系も関係なく、とにかくその場所をどうステージとして使っていくか、どう魅力的に磨き上げていくか、というところに移っています。

僕は地縁系やテーマ系などを無理に融合することはなく、必要なところではそれなりの形が出来てくるだろう。我々、行政側の方も、そういうものを受け止めて一緒にやっていく土壌はもう十分、出来ていると思います。これからは、そういうハードの面のまちづくりなどは、様子がだいぶ変わってくるだろうな、と思っています。

野原：横浜での市民まちづくりは、やはり、企画調整局からの流れである都市デザイン室がある種の、源流を担っていったと、はっきりと言えるという理解でよろしいのでしょうか。環境保全や川の活動をされている中で生まれてきている市民活動と行政との関係を全体的に俯瞰して見た時に、都市デザインと市民まちづくりとの関係は、どのような位置付けにあったのか、お伺いしたいということです。二点目に、先程も議論があった通り、市民参加から市民提案へ移ってきている中で、行政はそこへどういう形で今後、関わっ

ていくのか、ということについてもお答えいただきたいと思います。

最後にもう一点、まちづくり活動の担い手として、今日のお話の中にいろいろな方の名前が出てきました。横浜の市民まちづくりは『『市民』』と言ってほとんど専門家ではないか」という人たちがたくさんいます。横浜にいと分らないかもしれませんが、地方のまちづくりはこういうことはあまりない、と言いますか、活躍してくださる市民の方はたくさんいらっしゃるのですけれど、本当に専門家として、真ん中でコーディネートしてくれる人たちは、そんなにたくさんいるわけでもないのです。横浜ではそういう市民専門家という方々がたくさんいらっしゃる。そういう中で、組織としての行政ではなくて、一行政マンとして考えた時の、お二人、あるいは市の職員の方々が、どういう形で市民まちづくりの中で役割を果たされているのか、についてもお伺いできたら、と思います。

綱河：最初の、市民まちづくりの中で、都市デザインでやってきたことが源流かどうか、というところ。私が始める、はるか以前からですけれども、きょうお話しなかった、昭和55年(1980)に行った「都市デザイン基本問題調査」の中でも、もう既に、地域まちづくりや市民参加のこと、それから昭和58年(1983)の「都市デザイン白書」ではもう「次は、やっぱり協働型のまちづくり、これそのものがもう市民ニーズなんだ」というようなことをきっぱり言っています。

です。かなり昔から、次の時代はこういう波が来るだろう、と予想されていて、都市デザイン室の中でもそういうことをいろいろ取り込んでいる。区の魅力づくりとかそういう活動が発展していく流れを見ると、僕自身の考えでは、まちづくりの意識はいろんなところにもあったと思うのですけれども、実際にまちづくりに落とし込んで形を作っていた点では、都市デザイン室の活動がもともにあるのかな、と思います。都市デザイン室と一緒に、企画課がいつも陰に日なたにいますので、その両方で形作っていたものかな、というふうに思います。

2点目については、私、公園の管理をやっています

て、市民側が提案をしてくるスタイルはますます増えていこう、と感じています。それをしっかりと受け止めて、いい方向に導いていく、ということを職員と一緒にやっていくことが、今は課題になっています。

賀谷：参加から協働へ、ということと言うと、横浜コードでも「対等の原則」という目標を共有して対等な立場で一緒に考えてやっていく、という基本的な考え方があり、そういうステージまで来ています。ただ、それが全ての行政の事業に当てはまるものではないのです。それにふさわしいところでは、そういうことができる時代にはなっているはずですよ。

先程の話の繰り返しになりますが、行政は人・もの・金の問題に苦しんでいる一方、市民側が力を持つようになり、事業主体になって、対等だの何だのというよりも、普通に受託者としてやっていかれるところまでできてきている、という感じはします。

私が個人的に関わっている TR ネットの例で言うと、鶴見川は国の管理なので市とお付き合いしなくても大丈夫、と言うか、もつぱら国の河川事務所とやっていて、流域センターという施設の運営を NPO で請け負っています。あそこでは、協働だ何だということさらない。もう、自分たちが提案してきたことが形になっているし、そこの運営に関わるのも当然、という中でやっているのだから、ことささ言わなくても、協働と言えるかどうか分かりませんが、市民側としてもやりたいことは、一つの受託団体として、ある程度のことにはやれる部分も出てきています。

鈴木：専門家のような市民が結構いる、ということ。私の方から言うと、今回、市民参加をテーマの一つに組み込んだのは、すごく危機感みたいなものがあつたことと関係しています。村橋先生が亡くなられたこともあるのですけれども、今の横浜の市民協働を支えてきた中心的な人物は、90年代のさまざまな仕掛けの中で活躍されてきた方たちで、今でも中心的な役割を担っていると思うのです。逆に言うと、そのリーダー層の高齢化が進む一方で、そのフォロワー、次の時代のリーダーは行政の中でも市民サイドでも

どうなのだろうか、というところがあります。市民参加という部分でも、都市デザインという局面を見てもそうなのですが、それを支えている専門家もかなり年代が高くなっている。10年後にはどうなるのだろうか、という懸念が都市デザインについても市民参加についても言えるのではないかな、ということがあるのです。

そういう意味では「プロフェッショナルな市民」の人たちが、実際には中間支援的なところまで担っているのではないかと、ということがあり、そういう状況について、横浜は特殊な状況なのか、それとも、横浜ぐらいの大都市だったら当然なのか、という趣旨の質問だと思います。

賀谷：私が最初に関わっていたのは「かわの会」で、行政マンか市民がよく分からない、みたいな不思議な専門性の中でやっていて、横浜はすごく大きいんだな、という感じは持っていました。市民サイドにもいろんな人がいたのですけれど、北沢さんが亡くなって、村橋先生が亡くなって、環境では「かわの会」の中心だった森さんが亡くなって、そういう仕掛け人みたいな人たちが続々いなくなって、という現状があります。

全く別の視点で見ると、私が政策の方にいた時に、横浜会議という政策研究を提案型で受けて実現する仕事をやっていて、その時に、子育て支援拠点をやっている人たちと出会いました。子育て支援拠点とか子育ての広場、という話はある種、市民側の発想から出てきた事業です。そういうお母さんたちが、自分たちの居場所というか、孤立を自分たちで解決するために場所づくりを始めていたのが事業化されたのです。そういう子育てに関わる NPO や、市民セクターよこはまという福祉関係の団体で、中間支援組織みたいな形でやっている団体などを見ると、福祉系や生活系などでは、市民のパワーは「相変わらず」と言うのか「ますます」と言うのか、あるな、とは感じています。

網河：実際、同じ活動団体の人はなかなか変わらない。けれども、その時に必要があつて、また新たな団体が

土井一成
小沢朗今井信一
堀勇良小田嶋鉄朗
中野創

秋元康幸

菅孝能

山路清貴

網河功
賀谷まゆみ

宮澤好

できると、そこは若いメンバーが中心、ということもあります。一緒にやってきたところの人たちが、その次どう引き継いでいくか、という課題はあると思うのですが、市民活動全般で見れば、次につながる動きもあると感じています。

賀谷：もう一つ、BankARTにも注目しています。

鈴木：バンカートにはいろんな人が集まって、新しい人脈を形成している。そういうネットワークのハブ機能を果たしている、とは確かに言えると思います。

賀谷：インターネットのSNSのような形でいろいろやっている人たちも、市民参加の新しい形だと思います。開国博 Y150 で「一粒の種を成長させましょう」という思いでやっていた人たちが、本当に一人から始まって仲間をつくり、今も活動していたり、OPEN YOKOHAMA という「横浜のブランドを考えましょう」と「ワールド・カフェ」の手法でポンと来た人たちがいろいろ話し合っって新しいつながりができて、出てきた市民グループもある、と聞いています。全然違うステージで生まれる市民活動の担い手もあるのではないかと、思っているところです。

鈴木：市民参加は、これからさらに深めていかなければいけない問題であり、また横浜都市デザインを考える上でも、これから先、もう一回、空間の問題を参加によって解決していく可能性を追求することが必要ではないかな、とも思いますので、これからも継続的に取り上げていきたい、と思っております。

VII

